

JAC のアワードをいただいて

TheProducers のプロデューサー西原正浩です。

TYO CampKAZ から独立して 2 年になります。

僕が JAC のアワードを頂戴したのは 2016 年で 32 歳、プロデューサー 2 年目の頃でした。

当時、プロデューサーとは何かもわからず、演出志望だった僕は

フィルム作るって楽しいな！の延長線で、プロデューサーという名刺を持たせて

いただいて、お仕事をしていました。

当時、ディレクターズカンパニーで育った僕がプロデューサーになって

目指していたことは、最高のフィルムを頑張って作ること、

若手ディレクターと二人三脚で新しい仕事を作ること、

そのお仕事を通じてディレクターもプロデューサーも成長をしていくことでした。

Adfest の FABUROUS FOUR で TYO の若手 Dir の金野恵利香さんと

グランプリを受賞できたこと、一緒に CampKAZ で育ってきた Dir 吉村瞳さんと

石川県の地域振興のフィルムをコンパクトな予算の中でも丁寧に制作できたことは

僕のプロデューサーとしての自信になりました。

そのプロデュースを通じて、JAC のリマークブルプロデューサーオブザイヤーの

賞をいただいて、審査員の方々にお褒めいただいた内容は

今も鮮明に覚えていて、大切に思っています。

当時の僕は、プロデューサーとして、うまくいかないことも多く

このままプロデューサーになって、良い人生が歩めるのかを、真剣に悩んでいました。

当時の上司たちはそんな僕に JAC のアワードを紹介してくれました。

結果的に、この賞をいただいたことで、もうプロデューサーをやるしかしようがない！

この賞に恥じない働きをしよう！と決心ができました。

アワード後、今までお世話になってきた、たくさんのお客様から

新たなお仕事を頂戴して、また、JAC のアワードをご覧いただいて、

新規のお問合せをいただく機会も増えました。

JAC のアワードで知り合った、同じ年代の他社のプロデューサーの友達も

たくさんできました。友達との会話や情報交換は今も僕のエネルギーの

源になっています。

その後もたくさん失敗をして、たくさんの方にたくさん迷惑をおかけしました。
始末書も数えきれないほど書きました。リアルに泣いたこともありました。

でも、気づいたらプロデューサーという仕事が好きになっていました。

TYO を退社し、TheProducers という会社名でプロデュース業を始めて2年、
今も Dir 早川和良のディレクターズカンパニーCampKAZ で培ってきた
クラフトへの気持ちを忘れず、プロデュースとは何かを、模索する日々を続けています。
時代の進化に合わせて、クラフトへの情熱を応用したプロデュースの
新たな領域や可能性も探っています。

JAC プロデューサーオブザイヤーは僕の人生の中で、
大切なきっかけになったアワードです。
きっと、業界の未来を作る若手の皆様にも良いきっかけの賞になると
僕は信じています。

TheProducers
プロデューサー
西原 正浩